山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第16号（2003.8）

地域の美術館での作品鑑賞を表現に生かす
～日比野克彦展を通して～

隅　　敦

The Class to Improve Children's Expression by Appreciating Art Works in the Local Art Museum, Using the Exhibition of KATSUHIKO HIBINO

SUMI Atsushi
(Received June18, 2003)

キーワード：日比野克彦、鑑賞、図画工作科

はじめに

日比野克彦は、1958年生まれで、1982年、東京芸術大学大学院在学中に段ボールを用いた立体的なイラストレーション作品で第３回日本グラフィック大賞を受賞して以来、時代の変化に対応しながらその都度話題性のある作品を世に送り出してきた。また、彼の作品は小学校児童が用いる教科書[1)2)]に取り上げられており、さらにテレビ放送等のメディアにもしばしば登場し、子どもたちにもなじみのある作家である。彼の段ボールを中心にした作品を徳山市美術博物館（現周南市美術博物館）の学芸員である松本久美子氏は「見ているといろいろと想像が膨らむ。感性としては子どもの夏休みの工作とか図画工作に近い感じ」と評しているが、子どもたちにとっても自分たちでもできるのではないかという期待感を抱かせるものが多い。

本稿では、この日比野の作品を集めた展覧会に５年生の子ども79人と見学に至る経緯から、当日の様子、その後の授業展開も含めて整理してすることによって、地域の美術館での作品展示を図画工作科の授業の中でどのように生かしていくことができるのかについて、考察していきたいと考えた。

Ⅰ　見学に至るまでの経緯

５月

平成14年７月12日㈮から９月16日㈪まで徳山市美術博物館（現・周南市美術博物館）において、「日比野克彦展～ある時代の資料としての作品たち～」が開催されることを知った。本校の近隣の地区で教科書等に取り上げられた作家の作品を直に目にする機会は得難いと判断し、見学を行うことを考え、学年部および教務部等に相談し期日を決める。

７月９日㈫

徳山市美術博物館に電話して、９月６日に見学に訪れる件についてお願いする。当日は他の集団での見学の依頼もなく、しかも午前中であるので、一般の方の入場も少なく、団体で見学しやすいのではないかということだった。

7月13日(土)

「日比野克彦によるアーティスト・トーク」に筆者が参加する。当日約200名の参加者があった。実際の作品を前にして、日比野本人からその作品の制作の動機や過程など直に聞くことができる点では、大変参考になった。また、参加者には日比野の様子を中心に写真やビデオで記録することが許されており、筆者も事前指導用のプレゼンテーションを作成するための資料としてコンパクトデジタルカメラ（約30万画素）で撮影しておいた。

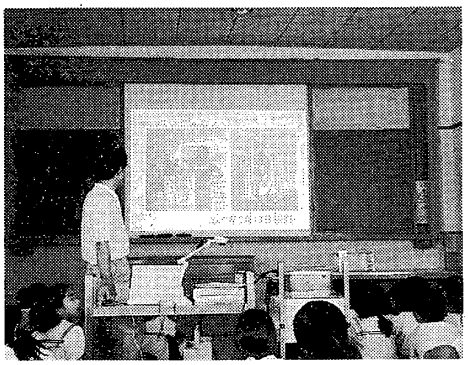
8月21日(水)

午前10時、事前打ち合わせで徳山市美術博物館を訪れる。学芸員の松本久美子氏にこちらの計画について説明し、当日のビデオ等の撮影についても許可を得る。79人という人数が一度に美術館に入ることについてスムーズな移動ができるように検討することにした。午後３時15分からテレビ山口放送TYSで放送された15分番組「創り人～日比野克彦展～」を録画した。

なお、事前打ち合わせに持参した見学の計画案は、別添資料の通りである。
子どもたちの移動については、バスおよび電車等の公共交通機関も考えたが、午後２時間は他の教科を行う必要があったので時間的なロスをできるだけなくす目的で、大型バス二台を契約し、当日はそれに乗って移動することにした。

１学期末に、この期日に実施することを子どもたちを通じて家庭に連絡していた。２学期が始まってすぐに「美術館見学についてのお知らせ」文書を各家庭に配布して確認することとした。

Ⅲ　事前説明



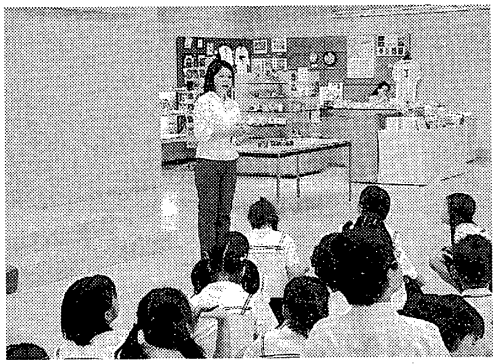
９月４日５校時に集会室にて、見学の事前指導を図画工作科の時間として１時間確保し両クラスが入ることの可能な集会室にて、行った。日比野氏についての簡単な説明と見学のマナーについてコンピュータで作成したプレゼンテーションを見せた後、ビデオに録画した「創り人～日比野克彦展～」を見せる。展覧会で作品を公開する作者本人が、その展覧会場に出向いて自分の作品について話をするという内容に対して、驚いていた。その理由は、子どもたちのほとんどは、展覧会に展示してある作品は、すでに存命していない作家のものばかりであるという先入観をもっていたようであるからである。また、日比野の外見も筆者と同世代であるにもかかわらず、金色に染めた頭髪やショッキングピンクのパンツや空色のTシャツやラメ入りの靴といういでたちに、アーティストらしさを感じて興味を抱いていた。反応は大変よく、早く本物を見てみたいという子どもたちが多かった。

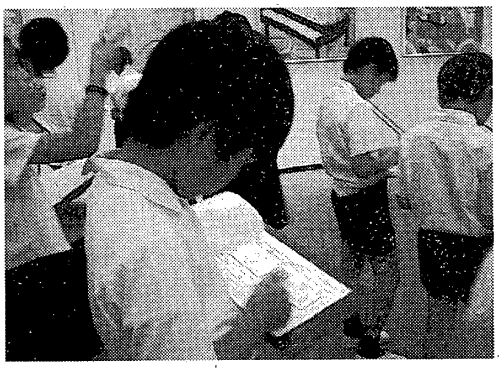
その後ワークシートを配布し、「展覧会を見る前の気持ちを書きましょう！」という項目について記入させた。以下に子どもの感想からあげてみる。（以下子どもの感想等は原

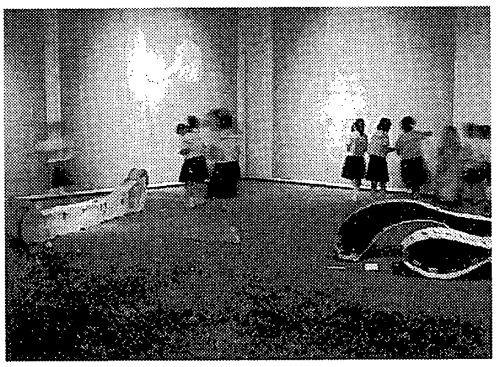
文のまま転載)
＊段ボールでどれぐらいすごいものを作れるのか「気持ち」がそわそわしていて、日比野さんとはどんな人物なのか、どんな性格なのか楽しみです。
＊工事現場の足場に絵や作品が飾ってあるのがおもしろそうです。作品の思いを、行くんだから感じられたらいいと思います。
＊日比野克彦さんの作品がどんな作品なのか楽しみです。ぼくは、段ボールで作ったグランドピアノを見てみたいです。
＊早く見てみたい。15分テープを見ていてもワクワクするものばかりある。クロード・モネとか見に行ったことがあるけど、それとはまたちがった感じがした。
＊ものすごく多い作品だからいろいろな角度で見てみたいです。あと、立体感よく見たいです。

事前にプレゼンテーションで、作品等を見せ過ぎたかも知れないという心配をしたが、ビデオ等を見せることによって、かえって本物を早く見てみたいという気持ちになった子どもが多くいたようであった、このように1時間ほど事前指導の時間を設けたことは意義があったと考える。

Ⅳ　見学当日の様子



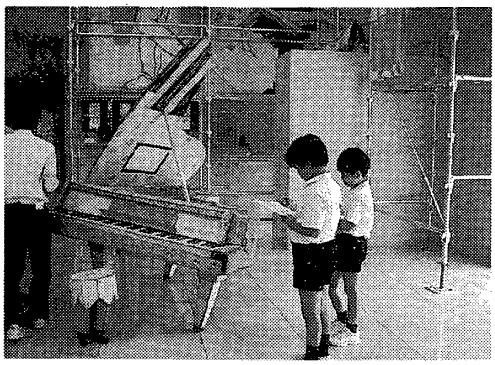




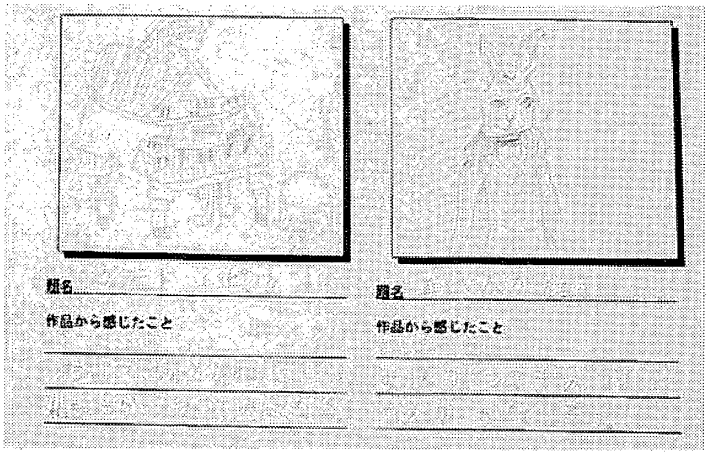
9月6日当日は、欠席する子どももおらず、移動も問題なく徳山市美術博物館に到着した。最初に学芸員の松本氏より、本展覧会についての簡単な説明を受ける。次にクラスごとに見る順番を1階からと2階からに分けて見学を開始した。筆者を含めて、3人の引率教官は、それぞれデジタルビデオカメラとデジタルカメラを持ち、子どもたちが作品にどう向かっていくのかを記録することにした。

数人ずつのグループに分かれて、移動しながら作品を見て歩く子どもが、時々立ち止まりながら、気に入った作品をスケッチし、自分の感想も記入していった。事前指導等で確認したので、見学のマナーについて問題はなかったようである。子どもたちは、工事現場の足場や金網を使って工夫された展示方法に驚いて「かっこいい」とつぶやいたり、効果的に作品を照らす照明に「美術館らしいね」とささやき合ったりしながら、作品を楽しんでいった。

当日のワークシートの項目「全体の作品を見てどんなことを感じましたか？」より、まとめると以下のようになる。
＊段ボールというものだけで、落ち着いた切ない感じ、明るく楽しい感じ、立体感などをこんなに上手に表現できるのだなと思いました。
＊色鮮やかで明るい感じの絵が多かった。でも、と



きどき暗く悲しい戦争などを表している絵もあった。どれも大きくて大きいのに細かいところまでかいてあってすごかった。
＊何かわからないものが多いけれど、題名を見ると何だか分かる。
＊段ボールの作品などが色がうすくてもはっきり分かることがよかったです。
＊全部一人で使ったと思えないほど作品があってびっくりしました。



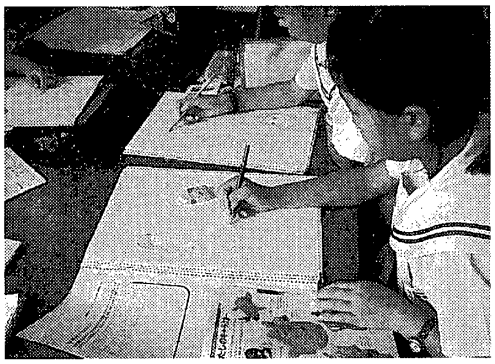
＊日比野さんの思いが全部詰まっている感じがしました。
＊段ボールというものだけで、落ち着いた切ない感じ、明るく楽しい感じ、立体感などをこんなに上手に表現できるのだなと思いました。
＊ふつうじゃない（ふつうは立体なら立体、平面なら平面にするのに立体と平面がまざっているのがあったから）

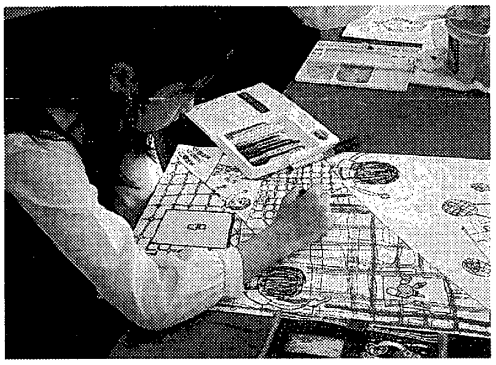
日比野展の全体の印象は、段ボールの立体作品、ガラスのオブジェ、キャンバスに描かれた油絵、映画などさまざまな表現方法を楽しむことができたという点で、子どもたちにとっても充実した時間を過ごすことができたようである。また、一人の作家の作品のみを集めた展覧会ということで、彼の制作に対する思いを自分なりに感じ取ろうとした子どももおり、それは、次のような「日比野克彦さんてどんな人だと思いましたか？」という設問に対する次のような記述からうかがえる。
＊今までにないような車や段ボールなどめずらしい物にかいていて新しい物を発想する頭のいいし、おもしろい人だなと思った。どちらかと言えば、明るく楽しい絵をかく人だと思った。
＊いろんな工夫を考え出して、それを使う（実力）すごい人。立体感を出して人に本物みたいにして見てもらったり、おもしろい工夫をしてみてもらったりしようと考えている。
＊いろんな意見を出していろんな作品をつくった人だと思います。作品から見ておもしろい人だと思う。
＊はっそう力がとてもするどくって、自分が思っていることをそのまんま絵にできるってすごいなと思います。
＊ いろいろな物を使って素晴らしい作品をつくれる人。だけど、おちゃめかな？

どの子どもも、日比野の多岐にわたる表現方法には圧倒されて心を奪われていたようであるが、日比野本人のユーモア溢れる制作の姿勢にも興味を抱いた子どもも多いようである。

Ⅴ 「日比野展を見学して」絵に表す題材の実践

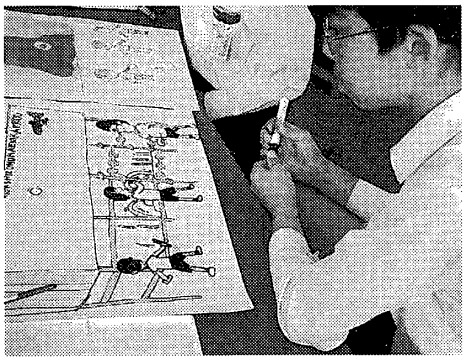
9月18日・10月23日・11月1日（5時間）

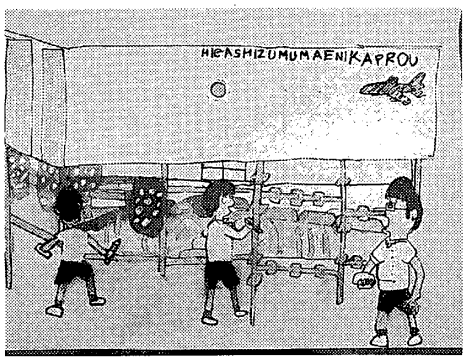




本題材は、見学をした時の様子を思い出して絵に表すものである。これまで、子どもの生活経験に基づく平面の題材としては、学校で遊んだことや、長期の休みに家族と過ごした内容を思い出して絵に表す題材に取り組むことが多かった。今回、子どもが実際に共通に体験した美術館を訪れた時の様子を絵に表して残していくことで、自分たちの見学をただ見て終わりにさせるのではなく、展覧会を見たことで、それが一人一人の子どもにとって、意義のあるものさせたいと考えた。また、子どもなりに作品の模写を行うことによって、作者の表現に対する姿勢を多少なりとも理解していくことにつながるとも考えたからである。

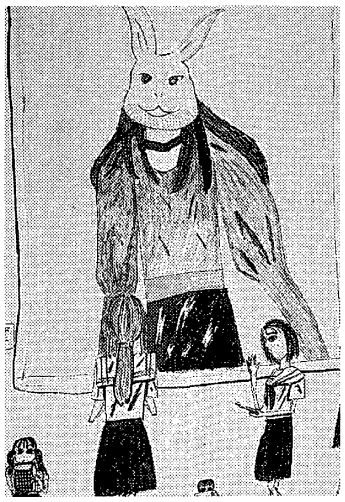
子どもたちは、自分のワークシートを見ながらお気に入りの作品などを見ている様子を思い出し、最初にラフスケッチを描いていき、ある程度構図等が決まったところで、４つ切り台の画用紙にマーカーや水彩絵の具、コンテ等を用いて描いていった。

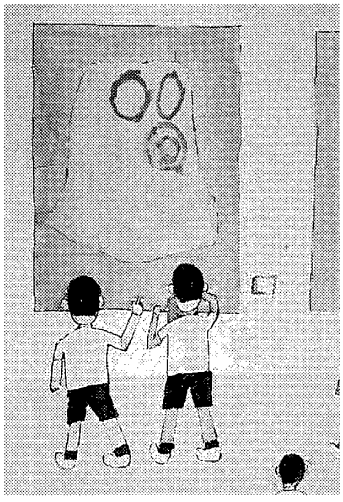




ただし、本来ならば印象の強い見学後すぐに１日使って絵を完成させるというのが望ましいのであろうが、本題材の実施中に運動会等の行事のために図工の授業を確保できなかったり、教育実習が入ったため他の題材を先行したりしたことで、完成は11月に入ってからになってしまった。そのため、毎回見学当日のビデオ画像や、デジタルカメラの画像をプレゼンテーションすることで、当日の印象が薄れないように配慮した。

日比野展での印象深いシーンを子どもたちが、それぞれの絵画表現で残していくことによって、自分の見た本物の作品を自分の中に一度取り込んでいくという過程を通すことができたのではないかと思われる。作品の前でじっと見ている自分をモチーフにした場合、どうしても自分の姿と作品を描かなければならない。そうすると、おのずと作品を模写することになり、その作品に対する見方が多少なりとも深まることを期待したのである。もちろん、作品を中心に描くことを指示はしていないので、作品よりも作品を見ている自分たちの方に重点においた子どももいた。





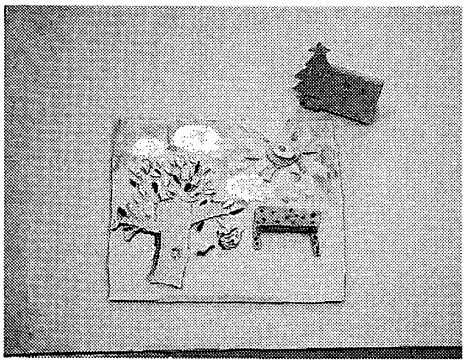
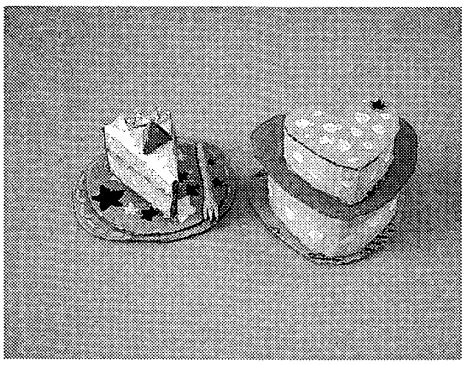
Ⅵ「段ボールを使って…」つくりたいものをつくる題材の実践

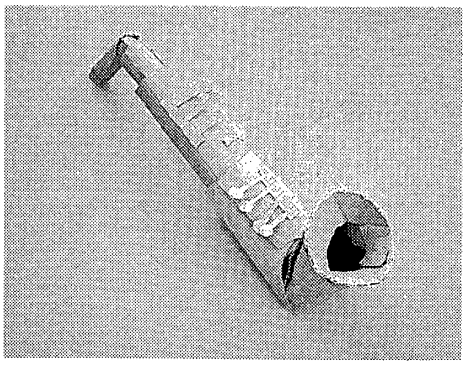
11月29日・12月13日（4時間）

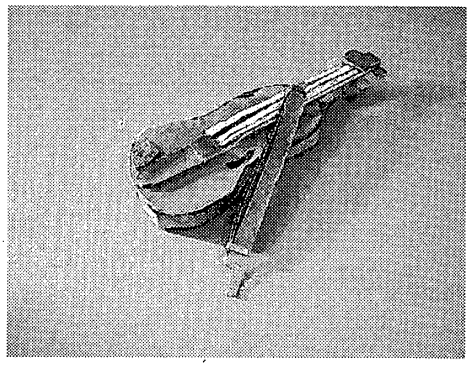
日比野展を見に行ったあとで、子どもたちが口々に「段ボールで何かをつくる題材」をしたいと言っていた。年間50時間の図画工作の時間では、4時間しか確保することはできなかったもので、この時間内に完成させることができるものという条件を設定して取り組むことになった。そこで、段ボールの使い方は立体的用いるのも平面的に用いてもよいことにし、段ボールを前にして浮かんだアイデアをすぐにスケッチしながら、制作に取り組ませることにした。

なお、制作に用いた用具としては、段ボールカッター、はさみ、木工用ボンドおよび水彩絵の具であり、日比野作品のように徹底的に段ボールそのものにこだわったものを目指すように促した。制作時間は十分とは言えないが、展覧会を見た後で段ボールを用いてつくってみたいという希望をもつ子どもが多かったことで、かなり意欲的に取り組んでいた。

作品は、大きな段ボール製のグランドピアノに影響を受けたのか、ヴァイオリンやサキソフォンなどの、別の楽器や、バースデイケーキからヒントを得たショートケーキなど、比較的自分たちの身の回りの物を作品にしていったものが見られた。また、中には、戦車や大砲などの武器をそのままモ





チーフにした子どもたちもいた。彼らの説明を聞くと、日比野の反戦的なメッセージをくみ取っているわけではないようで、むしろ、段ボールでつくる形としてのおもしろさに興味半分でということであった。

まとめにかえて

地域の美術館を鑑賞に利用するという実践は、現行の学習指導要領解説書[3]にも奨励されている。本校の子どもたちのほとんどが周南地域から通学してきていることを考えると「周南市美術博物館」は、身近な地域の美術館と言えるだろう。しかし、子どもたちの学習内容に合わせられる今回のような展示の企画が毎年あるとも限らないため、予め年間のカリキュラムの中でこうした見学の計画を位置づけることも難しい。また、大人数の子どもたちの移動の問題や管理の問題、さらに、美術館内でのマナーの指導等、越えるべきハードルの数は多い。

さて、12年間の教員生活の後に美術館職員となった山田一史氏は、「教員的美術館のあそびかた」と題して４つの極意を示している。[4] その極意の４つ目に「主体的なかかわりが美術館利用を楽しくする」として、

(1) 教育普及担当に必ず相談すること
(2) 下見と下調べを行い、子どもたちに体験させたいことを明確にすること
(3) 学校主体の指導計画を作ること
(4) 事後指導で価値付けをすること

と４つのポイントを挙げている。

筆者の勤務する小学校では、毎年６年生が２学期に広島市の美術館を２館選んで見学を行っている。平成13年度の６年生では、「岡本太郎と縄文」展に見学で訪れたことをきっかけにして、縄文土器から影響を受けた岡本太郎について注目し、その岡本太郎から影響を受けた自分ということで、彼の作品の連作をつくる実践をした。[5] 子どもたちが一人一人自分のお気に入りの作品の連作を自由にのびのびとつくることができたが、この時には遠距離であることが災いして一度も美術館を事前に訪れることができず、学芸員の方とも電話でしか打ち合わせをすることができなかった。今回の実践では、美術館が、筆者の自宅から車で約15分の距離であり、下見も打ち合わせも可能であった。このことで事前説明の資料づくりやワークシートを作成する際に大変役だった。こうして事前準備を十分に行うことや、「子どもの夏休みの工作のような感じ」と前出の松本氏の言葉にあるように、子どもたちにとって、親しみやすい表現物が多かったという点で,平面と立体という作品制作につなげ易かったのではないかと考えられる。

今回の実践を終えて次のような２点が今後の課題として残される。

約20年間にわたる日比野の制作の足跡は、企業とタイアップした一見ポジティブな展開が目立つようである。しかし、展覧会のサブタイトルが「ある時代の資料としての作品たち」であり、日本のバブル経済の破綻、地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災、米国における同時多発テロなど、その時代のできごとに「アートで何ができるか」という問題意識のものに取り組まれたものも無視することができない。作品に対する印象を「色鮮やかで明るい感じの絵が多かった。でも、ときどき暗く悲しい戦争などを表している絵もあった」と、日比野氏の作品の多様な面があることに気がついている子どももいただけに、作品のつくられた時代背景と共に彼の制作の姿勢について事前説明を行うことが必要であっただろう。これは、日比野だけの問題ではなく、どの作家でも制作の結果としての作品のみを見ると起こり得ることなので、今後も指導法を検討していくことが求められる。

また、日比野の20年間の軌跡を追う展覧会を見たことで、自分たちも作品を残していくことの意義を感じさせるために、最初は、子どもたちの作品の展示会を行う計画を立てていた。しかし、十分な作品の数をこなすことができず、さらに展示場所も確保できなかったために実現することはなかった。ただ、まとめて自分の作品を振り返ることができるように、スケッチブックに制作の過程や計画案、作品の画像などを残していくようにはしているが、丁寧に展示された自分たちの作品を楽しむことのできる機会を、学校の中でも設定していく工夫していかなければならないだろう。

注）

1）『HIBINO時の流れに』『ベース』「もっと自由な発想で」図画工作５ 編集 日本美術研究会　日本文教出版　1999年　表紙裏
2）『プレゼント・エアプレーン』「材料を生かして」図画工作５・６年下 編集 日本美術研究会　日本文教出版　2001年
3）「小学校学習指導要領解説図画工作編」文部省 2003年 p４
4）山田一史『教員的美術館のあそびかた』「形form No.269」2003年pp-24-25
5）「美術館での作品鑑賞を表現に生かす授業実践に関する考察～岡本太郎の連作をつくる実践を通して～」山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要15号　2003年 71-79

参考文献）

「日比野克彦展　ある時代の資料としての作品たち」編集　植田玲子　浜田久仁雄　荒井直美　松本久美子　矢内みどり　谷口輝久　毎日新聞社　2001年
「かるちゃ通信花畠2002年７月号」徳山市文化振興財団　2002年
「かるちゃ通信花畠2002年８月号」徳山市文化振興財団　2002年

参考ビデオ画像）

「土曜美の朝　空間を埋めつくしたい　アーティスト　日比野克彦」1997年5月17日放映 NHK
「創り人　～日比野克彦展～」2002年8月21日放映　KRY
「小学生の鑑賞～見る喜び～【５】（アーティストを尋ねて）」日本文教出版　1996年

資料）

H14. 9. 2

美術館見学計画案

山口大学教育学部附属光小学校

＊日　　時　　平成14年９月６日　午前９時～12時
＊場　　所　　徳山市美術博物館
＊対　　象　　山口大学教育学部附属光小学校５年児童80名引率教官３名
＊展覧会名　　「日比野克彦展～ある時代の資料としての作品たち～」
＊日　　程　　移動　出発９時～到着９時40分頃
　　見学　９時40分～11時25分
　　移動　11時30分～12時10分頃
＊準 備 物　　児童　美術館見学用ワークシート・鉛筆・下敷き・クリップ等
　　教師　デジタルカメラ・デジタルビデオカメラ等
＊目　　的

日比野克彦の多様な表現方法に触れさせることで、自己のこれまでの表現を振り返らせるとともに、多様な表現方法の可能性について実感させる。また、この展覧会の見学を機に、自分の２学期の作品をまとめた展覧会を開くことを前提にして、作品づくりやその時々に感じたことを残していくことにする。

５年生保護者　殿

山口大学教育学部附属光小学校
校長　長崎　伸仁
５年　担　　任

美術館見学についてのお知らせ

時下　皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平素より本校教育に、ご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。さて、下記にて、５年生による美術館見学を計画いたしましたのでお知らせいたします。

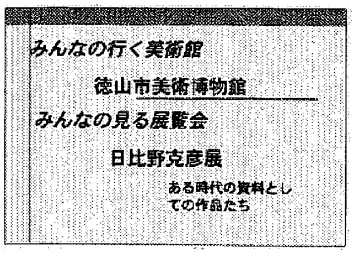
記

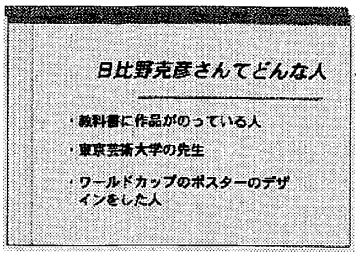
１　日　　時　　平成14年９月６日　午前９時?12時
２　場　　所　　徳山市美術博物館
３　展覧会名　　「日比野克彦展?ある時代の資料としての作品たち?」
４　対　　象　　山口大学教育学部附属光小学校５年児童　81名
５　日　　程　　移動　（出発：普賢寺裏駐車場）９時～到着９時40分頃
　　見学　９時40分～11時25分
　　移動　11時30分～12時頃(到着：普賢寺裏駐車場)
６　準 備 物　　児童　・手提げ袋、美術館見学用ワークシート・鉛筆・消しゴム
　　・下敷き・クリップまたは洗濯ばさみ（下敷きにワークシートをとめるのに使います）

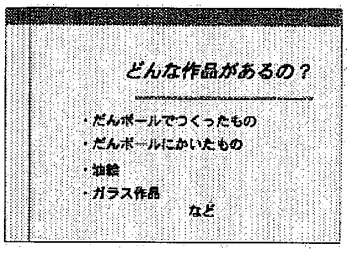
7　費　　用　　○運賃約1,000円（学級会計にてのちほど徴収いたします）
　　○入館料は無料です

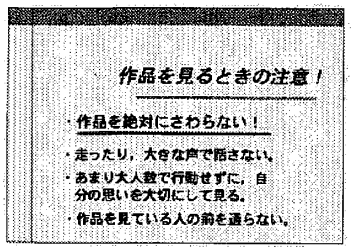
8　引率教官　　池本順子　星野朋啓　隅　　敦

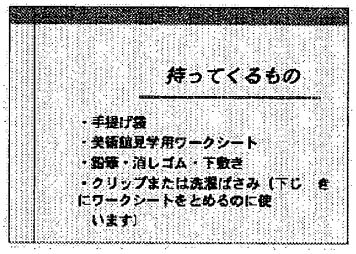
＊当日は、子どもたちは、通常の通学をした後で、普賢寺裏駐車場から出発します。昼食は、給食を取り通常通り午後の授業を受けます。

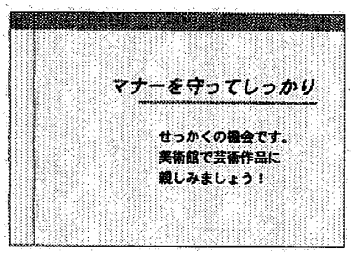


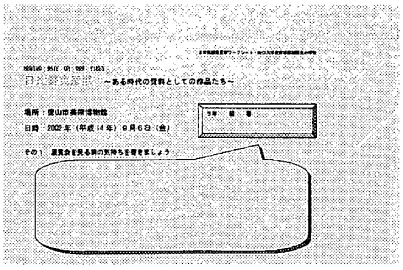


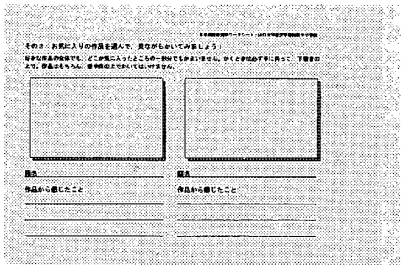


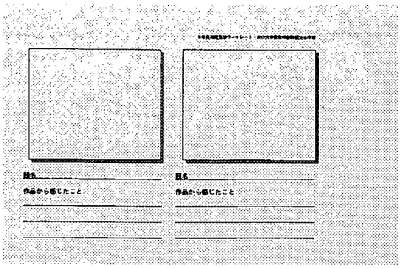


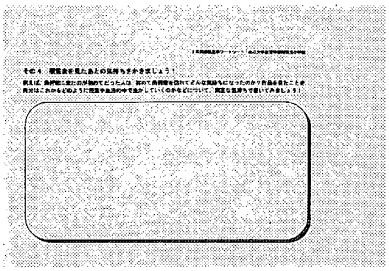


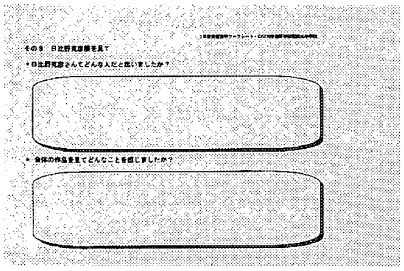












付記

美術館見学の実現までに、周南市立徳山美術博物館のスタッフの方々には、大変お世話になりました。特に、学芸員の松本久美子氏には打ち合わせの段階からご協力いただきました。心より感謝いたします。